

聖霊降臨後第14主日(特定17)

2010/8/29

聖ルカ福音書第14章1節、7節-14節

於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

今日の福音書は、最初にルカ福音書14章の1節が置かれています。そして、それに続く物語を飛ばして、7節以下のイエスさまの教えが取り上げられています。初めに置かれた1節は、イエスさまが7節以下の教えを述べられた時の状況が、どのようなものであったか、そのことについて記されています。

つまり、その日は安息日であったことと、ファリサイ派の議員の家に食事に招かれた、その席での教えであったことが明らかにされています。

そこで語られた教えについて、新共同訳聖書の小見出しでは、「客と招待するものへの教訓」となっています。2つの教訓が語られたということです。1つはお客になった場合のこと、もう1つは招待する立場になったときのことです。

わたしたちもお招きをいただくようなことが時々あります。気の置けない仲間内のことであれば、誰が何処に座ろうが、そんなことは問題にもならず済むことでしょう。しかし、正装をしていかなければならないような席では、席順というのは、決しておろそかにするわけにはいかない事柄です。

もう昔々、わたしの若い頃のことになりますが、ある結婚披露宴に招かれたことがあります。丁度、同じ席に、わたしよりも先輩のある聖職の方も招かれていました。時間になっていざ会場に入っていくところ、正面に新郎新婦の席があり、客席は縦に何列かしつらえてありました。わたしの席は、その先輩聖職の方の隣でしたが、その方よりも新郎新婦に近い方の席でした。

これは順序が逆じゃないかと思ったのですが、その場で席を変えるわけにもいかず、その結婚式の司式もわたしが受け持ったので、これで良いのかなと思い直して、そのまま席に着きました。その先輩聖職の方は、そんなことは少しも気にはなさらなかったのですが、しかし、わたしとしては、初めのうち、落ち着かない居心地の余り良くない気分でしたことを覚えています。

わたしたちは、どのような順序の中に自分が位置づけられるのか、ということに無関心ではられません。いろいろな基準がありますが、今、挙げた先輩後輩というのも極めて根強くわたしたちの中に形づくられている秩序の一つです。

先輩というのは、ただ単に先輩だ、序列が上だというだけで敬われるわけでは決してありません。どのような世界であっても、もし仮に後輩が良い成果を上げることができたとしたら、それは、後輩一人でそのような結果に達することができたわけではありません。目にははっきりとは見えないかも知れないけれど、多くの先輩が、それまでに努力して少しずつ積み重ねてきたものがあつたからこそ、その上に立って立派な成果が上げられたということになるわけです。

それを無視して、あたかも自分一人の努力で何かを成し遂げたかのように思ったら、それは実際、現実的ではないし、そんな考えを持っていることが知れたなら、あいつは鼻持ちならない奴だということになって、相手にされなくなってしまうでしょう。その世界の中にある秩序の論理から外されてしまうことになります。

だから、先輩後輩という関係を損なうようなことは避けることが、賢明な生き方であるということになるし、その秩序の中での自分の位置がどこにあるのかを見極めて、そこに落ち着いていれば、取り敢えず安心していられることになるわけです。

たとえある世界の秩序が、形だけが残っただけで、中味の乏しいものであったとしても、骨組みまで解体することは、なかなか困難なことです。内容がなくても形を保ち続けていられるのは、そこにれっきとした、人と人との序列が形成されているからです。

人間の社会において、それがどのような基準であれ、秩序が保たれていれば、問題は生じません。ところが、今日のイエスさまのたとえ話では、人間社会の論理を超えて、この秩序を破ることが起こってきたのです。

上座を占めようとした人が、後から身分の高い人が現れたために、その人に席を譲らなければならないことになったのです。みんなの前で恥をかきながら、すくすくと末席に着くことになったというのです。

だから、招待されたら末席に座っていれば、招待主が来て上座に案内してくれることになる。そうすればほかの客の前で面目を施すことになる、と教えられています。イエスさまは、上手く世渡りをするための知恵、世故に長けた知恵を教えようとされたのでしょうか。処世訓を垂れようとなさったのでしょうか。そうではありません。神の国に入るのは、ただ神さまのお恵みによるほかはないということを教えようとされているのです。

それにしても、上座に座ろうというのですから、わたしたち普通の日本人の感覚とは随分異なっているように思われます。わたしたちは、その場における自分の位置をちゃんと計って確かめてから行動しようとしています。上座に座るにしても、自分から進んでその座に着こうとはしません。周りから推されてやむを得ず着くという形をとるのです。

どうしてこのたとえの人物は上座に座ろうとしたのでしょうか。そのことを考えるにあたって、このたとえが語られた状況を思い起こしていただきたいと思います。それはある安息日のことでした。会堂での礼拝が行われ、イエスさまもその礼拝に出席したのでしょうか。もしかしたら、その礼拝の中で説教をされたかも知れません。礼拝が終わって、ファリサイ派の有力な議員の家に食事に招かれたのです。その議員は、会堂の礼拝に責任を持っていた人かも知れません。

その食事の席で起こったことは、初めに申しましたように、今日の福音書では省かれています。そこで行われたことは、イエスさまが水腫という病気の人を癒された物語です。そして、安息日に病気を癒すことは律法で許されていることか否かと、イエスさまはファリサイ派の人々に問うています。

律法を遵守する、それがファリサイ派の立場です。考え方だけではありません。それを解釈して実行したのです。そうすることで神の国に入る資格を得ようと、必死に頑張ったのです。だから、安息日についての規定をイエスさまが守ろうとするのか、それとも違反し破ってしまうのか、その様子を伺っていたのです。

イエスさまのたとえで、上座に座ろうとした人は、この律法を遵守しようとしたファリサイ派の人のことです。ファリサイ派以外には、律法を完全に守れる人たちはいないのですから、ファリサイ派が神の国の宴会でも、上座に座るのは当然のことな

のです。だから当たり前のこととして、自分のために用意されていると思われた席に着いたのです。

これは決して人間の秩序を破ったことではありません。律法に従った生活を行うという基準に則って行動したまでのことです。ところが、そのファリサイ派よりもその席に座るのに相応しい人が、後から招かれてきたのです。それはファリサイ派には思いも寄らないことでした。

しかし、それが神さまのなさりようなのです。神の国ではこの世の秩序の体系が、そのまま移行していくことはないのです。

「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」というのが、神の国の論理なのです。自分には神の国に入る当然の権利がある、そのように自他共に思っ上座に進んでいったファリサイ派は、退けられなければなりません。そして、その席に代わって座るように招かれた人は、ファリサイ派が、普段、罪人と呼んでいた律法を守ることができない人たちでした。

2番目の教訓として、人を招待する場合に、誰をどのような人を招きなさいと教えられているか、思い出して下さい。貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさいと勧められています。貧しさの故に、身体に「障害」がある故に、律法を守るにも守れなかった人々です。

それだけではありません。これらの人々は、「目や足の不自由な者は神殿に入ってはならない」(サムエル記下 5:8)と規定されて、神殿から排除されていた人たちです。神殿に入ることができなかつたということは、神さまを礼拝することが許されなかつたということです。このような人々を招くことが勧められているのです。

神さまの関心は、律法を完全に守って自らを高くする人にあるものではありません。律法を守ることができない、破ってしか生活することができない、そのような人々に神さまの慈しみの眼差しは注がれているのです。

同じルカ福音書に、神殿に上って祈りを捧げた2人の人のたとえ話が記されています。1人は自らを正しい人とするファリサイ派でした。もう1人は「罪人のわたしを憐れんでください」と神さまの前に頭を垂れた徴税人でした。イエスさまは、この徴税人が義とされたと言っています。そして、ここにも「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」(18:14)という同じみ言葉が記されていることを心に留めたいと思います。

教会に求められていること、それは信仰生活を優等生からそうでない者へと順番に並べてランクづけることではありません。そのランクの中で、自分が何処に位置するかを見極めて安心することでもありません。或いは、貧しい人々や「障害」を負っている人々を対象としたプログラムを展開して、ささやかながら良い働きが出来たと自ら納得することでもありません。

そうではなくて、神さまの関心の中にある人々を主の食卓に招き、一緒にパンを裂くことこそが、教会に対する神さまの期待なのです。その期待に添うために、わたしたちもまた、お恵みの中に招かれ、主の食卓に連なるのです。主に感謝。